和歌山大学経済学会『研究年報』第14号（2010年）pp.125-141　ISSN 1880-490X

19世紀後半の金産出の増加とW.ニューマーチ

W. Newmarch on the Effects of the Gold Discoveries of the 19th Century

片　桐　　謙
Ken KATAGIRI

1　はじめに

従来の貨幣・信用論史において，W.ニューマーチ（William Newmarch）が考察の対象となることはなかった。一般に，彼の名は，T.トゥーク（Thomas Tooke）と共に『物価史』第5，6巻を著した人物として知られている程度であろう。全6巻からなるこの書物のフルタイトルは『1792年から1856年までの，物価および通貨流通状態の歴史（*A History of Prices,and of the State of the Circulation from 1792 to 1856*）』であり，物価史と同様の比重が，貨幣・信用史にも与えられている。(1)

『物価史』は第1 - 6巻にわたって，第一に，正貨支払い制限および正貨支払い再開がイングランドの物価と外国為替に与えた影響，第二に，イングランド銀行の政策，そして第三に，イングランド銀行の組織および銀行券発行に関する議論，を論じている。更に付随して，穀物法と関税に関する考察，鉄道網の拡張に関する考察，新産金がもたらした経済的影響に関する研究を扱っている。このうち，貨幣・信用論に関わるのは，初めの主要な三つの論点，そして最後の新産金の影響である。

この『物価史』の最後の論点である新産金増加の経済的影響の箇所を執筆したのが，ニューマーチに他ならない。19世紀後半の世界の金産出の増加の経済的影響に関して，彼は，J.E.ケアンズ，W.S.ジェヴォンズに対抗して，独自の論陣を張った。(2)本稿では，19世紀後半の新産金の増加の経済的影響に関するニューマーチの論説を対象として，彼の貨幣・信用論を考察する。(3)

（1）「この書のタイトルは，『1792年から1856年までのイギリスの経済諸過程の分析，とくに通貨ならびに信用の状況に関して』と改められるときに，より適切なものとなるだろう。」Schumpeter（1954）p520，邦訳（中）264ページ

（2）この議論において，ケアンズに関しては片桐（2009a），ジェヴォンズに関しては片桐（2009b），を参照。

（3）ニューマーチは1850年代のイングランド銀行の金融政策の議論において銀行学派に属し，トゥークと共に，1844年ピール条例を批判した。

2　ニューマーチ，トゥーク，『物価史』

ニューマーチの社会科学への貢献は，統計学と政治経済学の二つの部面にわたる。[(4)]前者に関しては，王立統計学会（the Royal Statistical Society）[(5)]に1847年に入会し，その主要メンバーであった。1854-62年に幹事を，1869-71年には理事を務めている。彼はその会報に多数の論文を発表し，1855-61年にはその編者を務めた。[(6)]

また，英国学術協会（the British Association for the Advancement of Science）[(7)]の部会Fにおいて，1861年の議長を務めている。[(8)]この部会Fとは，1835年以来，統計部門を表し，56年以降，経済科学および統計部門を表している。[(9)]

本稿との関連では，1859年に，1851年を基準年とする19の財の価格を指数化し，1851-59年の8年間の商品毎の価格動向を表した。[(10)]当時，人々が商品価格自体の動向を分析していたのに対して，彼は，原始的手法ではあれ，加工した指数変動を分析していた点が注目される。新産金の増加に伴って，人々の関心が金価値および物価変動に向くなかで，彼は他に先駆けて商品価格変動を計数化していた。

更に1863年以降は，W.バジョット（Walter Bagehot）が編者を務める『エコノミスト（*The Economist*）』の付録，『商況の歴史および考察（*Commercial History and Review*）』の編者となり，1864年2月以降，同付録が発表した物価指数表を作成した。[(11)]以上のように，実証的統計研究が彼の研究の一つの柱であり，しかも物価指数が彼の一貫した関心であったことは，重要な意味をもつ。

ニューマーチは単なる統計学者ではなく，経済学者でもあった。[(12)]彼は当時，最も勢力を誇ったポリティカル・エコノミー・クラブ（the Political Economy Club）[(13)]に1852年に入会し，

（4）ニューマーチに関しては，“William Newmarch, F. R. S.”*The Economist*, 25 March,1882, pp343-344,“The Death of Mr.William Newmarch, F. R. S.”*Journal of the Statistical Society of London*, vol.45 no.1, March 1882, pp115-121, Fraser（1934）, FitzPatrick（1960）, Ashbee（1979）, O' Brien（1998）, を参照した。

（5）1834年にロンドン統計学会（the Statistical Society of London）として設立。本学会に関しては，杉原（1973）55-69ページ，参照。また，古典派経済学者達の組織に関しては，O' Brien（1975）pp12-16, 参照。

（6）Royal Statistical Society（1885）pp367-368. 後に，本学会は彼の功績を次のように評している。「（本学会の：引用者）評議会は，ニューマーチ氏の『価値ある尽力』と『彼の編者としての指導のもとで，会報の実用的かつ科学的性格』の認識を『賞賛』した。彼の後継者が彼の基準にどれ程，従っているだろうか，と言う人々もいるほどである。」Royal Statistical Society（1934）p88

（7）1831年設立。

（8）Newmarch（1861b）

（9）cf.Smyth（1971）

（10）Newmach（1859）p100

（11）Gregory（1928）p6, The Economist（1943）p140, 邦訳241ページ

（12）“The Death of Mr.William Newmarch, F. R. S.”*Journal of the Statistical Society of London*, vol.45 no.1, March 1882, p115, p117, Fraser（1933）p368

（13）1821年に設立。同クラブに関しては，藤塚（1973），参照。

亡くなる82年までの30年間，会員だった。[14]

同クラブで彼は1853-80年に，計27の経済問題を論じた。[15]そのうち，新産金の経済的影響に関しては，1854年4月6日の「昨年から現在のわが国において，カリフォルニアとオーストラリアからの新産金の結果，金が以前よりも減価していることを，何が示しているのか？何が証拠なのか？」[16]と，1860年2月2日の「新産金の流入の一般的影響は，有利なのか，不利なのか？」[17]の二つである。その他，『エコノミスト』や『モーニング・クロニクル（*Morning Chronicle*）』へも匿名で寄稿した。[18]

彼の主著である『物価史』は，『物価および通貨流通状態』の，単なる『歴史』ではない。シュンペーターによれば，本書は「事実の提示とその説明とのそれぞれを別個の課題として区別することなく，あらゆるステップにおいてこの両者を相互に条件づける形で結びつけているようなタイプの分析…この種の業績の頂点を極めたもの」[19]である。また，Gregory（1928）は二人の著者を，次のように論じている。「トゥックとニューマーチは，実際には，『純粋な』経済史家たることからはほど遠かった。…彼らは，歴史家ではあったが，ある目的をもった歴史家であった。そしてその目的とは，彼らと敵対する経済的主張を追求し，できればこれを粉砕することであった。」[20]彼らは歴史的実証から経済理論を導き出すという点で，当時にあっては，画期的な研究手法をとった。そしてこれは，統計学者であり，政治経済学者でもあったニューマーチにとって，当然のことであった。

ここで『物価史』におけるトゥークと，46歳年下のニューマーチの関係について，触れておこう。『物価史』第1 - 4巻はトゥーク単独の著作であり，『1848-1856年の9年間における，物価および流通状態の歴史』と題される第5，6巻は二人の共著である。彼らは1854年夏に第5巻の準備にとりかかり，[21]55年6月末には，第1編第17節（133ページ）までは印刷に回されていたという。しかしクリミア戦争や，カリフォルニアおよびオーストラリアからの新

（14）同クラブの会員によるニューマーチの評価は以下のように，様々である。Macdonellは，同クラブの活動の第二期-1846-71年- に関して，「個人主義者の最右翼として，彼の名を挙げざるを得ない。（Political Economy Club（1921）p343）」と述べている。Harrisonは，「クラブの根気のよい幹事，労働組合，社会主義，そして労働法への激しい反対者（Political Economy Club（1921）p313）」と評している。そしてHiggsは，「なぜゴッシェン，コートニー，マクドネル，その他の厳しい批評家達が，ニューマーチをそれ程，高く買っているのか，彼の書いたものしか知らない人々には，分からないだろう。それは，その人物の異常なエネルギー，銀行経営者としての実務への習熟，古風で頑固なエコノミストの全くの活力と厳格さによるものかもしれない。（Political Economy Club（1921）p350）」と述べている。

（15）Political Economy Club（1921）pp428-430

（16）Political Economy Club（1921）p69

（17）Political Economy Club（1921）p77

（18）*Proceedings of the Royal Society of London*,vol.34,1882-83,ppxvii-xix

（19）Schumpeter（1954）p520, 邦訳（中）264ページ

（20）Gregory（1928）p7, 邦訳8ページ

（21）Tooke and Newmarch（1857）vol.5,px, 邦訳第5巻（上）9ページ

産金の産出増加の影響を考慮するため，完成は56年に延期され，同年7月に印刷が再開された。[22]

第5，6巻は，（1）1847-56年間の諸年の天候および穀物取引の状態の説明，（2）製造品および穀物以外の諸商品の市場における一般的取引状態および諸価格について，（3）鉄道投資および当時のように発達した鉄道組織の進歩とそれのもたらした諸結果について，（4）1820年から当時にいたるまで，わが国および諸外国の商業立法に自由貿易の原理が相次いで適用されていたことについて，（5）1844-56年に期間中のイングランド銀行の管理と政策について，（6）1847年以降のフランスにおいて，財政および銀行・信用組織にかんして追求された政策について，（7）カリフォルニアおよびオーストラリアからの金の新供給によってもたらされた諸変化の経過と規模と性質について，の七つの編，そして付録として，16,7世紀の貴金属の流入に関する研究，からなる。ニューマーチは，このうち，（2），（3），（4），（6），（7）の五つの編と付録を執筆した。[23]また彼は，第5，6巻を通じて，統計と表を作成した。[24]更に，トゥークは第5巻の「序文」において，ふたりの考えについて以下のように述べている。「(ニューマーチによって：引用者）表明されている見解も伝えられている知識の趣旨も，完全に私と意見を同じくするものである。[25]」と。

以上のような性格，経過，そして構成をもつ『物価史』に対して，シュンペーターは先の引用に続けて次のように述べ，酷評している。「しかしながら果たしてこの両著者がみずから果たしえたであろう程度まで，この方法を扱ったかどうかは，これとは別個の問題である。…私の真に言及したい点は，この書の持つもっと根本的な欠陥に関するものであって，それらは，この書の各巻の素養ある読者ならば速やかに気づかざるをえないものである。すなわち，両者ともに，経済理論の把握に欠けるところがあったのは疑問の余地がない。加うるに，トゥークはいささか『朦朧たる』思索家であった。[26]」と。

本稿では，果たしてシュンペーターのこの批判は，妥当するのか，否かを考察する。以下では，ニューマーチの，金産出の増加の経済的影響の事実認識と貨幣・信用論を明らかにし，両者が「相互に条件づける形で結びつ」いているのか，それとも「経済理論の把握に欠ける」とすれば，どのような「根本的な欠陥」をもつのかを中心に考察する。

3　ニューマーチと金問題

1848年にカリフォルニアで，1851年にはオーストラリアで金鉱が発見され，その後，世界

---

(22) Tooke and Newmarch (1857) vol.5,p134 fn., 邦訳第5巻（上）135ページ 注1）

(23) 各編の末尾のイニシャルNがそのことを表している。

(24) Tooke and Newmarch (1857) vol.5,pix, 邦訳第5巻（上）9ページ

(25) Tooke and Newmarch (1857) vol.5,pix, 邦訳第5巻（上）9ページ

(26) Schumpeter (1954) p521, 邦訳（中）265ページ

の金産出高が著しく増加すると，それが産金国・非産金国経済，および世界経済にどのような影響を与えるのか，に関する論争が起こった。その内容は，物価の上昇，または金価値の下落が生じているのか，に留まらなかった。ニューマーチは，1848年以降の金生産の増加に伴って生じた議論を時系列的に次の五つに区分している[27]。最も初期の推測と思惑は，金価値の下落と物価の急速な上昇だった。第二に，その後，金銀比価が変化すると，金本位制から銀本位制への移行が議論され，場合によっては実現された。第三に，1852-53年初頭には，新産金が永久的に利子率と割引率を低下し，金融逼迫が再発することはほとんどなくなるだろう，と考えられた。第四に，ほぼ時期を同じくして，物価の急速な上昇を予測する以前の考え方が復活した。そして1852-53年には賃金上昇を，一般的に金属的交換手段の減価と関連させるようになった。第五に，金の新供給が世界の真実の富の増加をもたらした，またはわが国に重要な利益をもたらしたと考えるのは，誤りであるという考えが提起された。

ニューマーチは，既にNewmarch（1853a）において，第二を除いて，これらの論点に関する一定の結論を与えている。すなわち，第一に，金生産の増加はアメリカ，イギリス，オーストラリア，フランス各国の鋳貨および兌換紙幣の増加をもたらした。第二に，新産金の増加はイギリスにおける物価上昇をもたらした。第三に，新産金の増加は労賃の上昇をもたらした。第四に，それにとどまらず，経済全体に利益を与えた。第五に，イギリスにもたらされた以上三つの結果は，流通手段の増加を通じたものではなく，一時的な金利の低下と資本の前貸によるものである。

また，後の1869年，ロンドン統計協会における「統計研究の進歩と現状」と題する講演において，彼は「わが国で最も注意すべき統計研究分野」として，「カリフォルニアとオーストラリアにおける金発見によって，商業，蓄積，創造，物価，そして金利にもたらされた影響に関する統計調査」を17番目に取り挙げた[28]。そこでも，第一に，金発見の影響は金利の永続的かつ重大な低下をもたらさなかった，第二に，新産金が物価を上昇させたのではなかった，第三に，世界の商業と，創造および発見の進歩は，金産出の増大から利益と刺激をもたらすよう作用した，と指摘している。金問題に関する彼の考えは，終始一貫していたといえる。以下では，これらの内容を検討してゆこう。

4　金生産の増加の影響

4．1　物価の上昇

まず初めに，上記の第一および第四の論点―物価の上昇，あるいは金価値の下落―に関するニューマーチの考えを考察する。ニューマーチは既にNewmarch（1853b）において，新産金がイギリスの商品価格および労賃に与えた影響を分析している。そこで彼は，1851-53年

（27）Tooke and Newmarch（1857）,vol.5,pp197-198,邦訳第5巻（上）178-179ページ

（28）Newmarch（1869）pp372-373

に関して，「新産金がわが国の原材料および消費財にもたらした影響を代表すると正当に考えられる」[29]主要な39の商品価格表を作成した。この表をもとに，当時，第一に，この2年半の間に原材料および消費財の価格上昇傾向が存在する，そして第二に，この物価上昇はいくつかの商品の供給と需要に影響を与える原因からは説明できない，という通念が存在していた。これに対して，ニューマーチは「物価上昇の始まり，持続，程度に関して，ほとんど統一性はない」[30]と考え，「価格表の変動を説明するのに，多くの場合，供給および需要に影響を与える原因に留意することが重要である」[31]と述べている。

トゥックは『物価史』第4巻を，1847年までの穀物価格動向，穀物以外の商品価格動向，そして通貨流通の状態，の三つから論じていた。この第4巻が刊行された1848年はカリフォルニアで金が発見された年であり，当時は51年のオーストラリアでの金発見と共に，それ以降の金生産の増加を予想できなかった。そのうえこの金生産の増加が「諸商品の供給とそれにたいする需要に関連する―また熟練労働者・不熟練労働者にたいする需要と，彼らの取得する賃金とに関連する―ほとんどすべての問題の様相を全く変えてしまった」[32]。これらの事情は，その後の『物価史』第5，6巻の分析視角と構成を特徴づけることになった。「もし新産金に関連する諸事実の検討に大きな場所を割くことなしに―また新産金の流入によって起こる一層重要な結果をあとづけようと試みることなしに―最近の9年間における物価のなにか系統的な研究を企てたとすれば，それは，すでに着手したこの仕事の性質をまったく誤解するものとなったであろう。」[33]そしてこの第5，6巻において，新産金がもたらした経済的影響を執筆したのが，ニューマーチであった。

ニューマーチはこの論点を，「事実の問題」と「経済学の理論のいくつかの応用を要する問題」[34]の二つから考察した。前者の「事実の問題」とは，「最近の9年間のカリフォルニアとオーストラリアからの〈金の〉供給によってもたらされた諸変化の実際の経過と性質とにかかわるもの」である。

その第一は，「商業世界のいくつかの地域の金属通貨の実質的増加にかんする問題」である。彼はまず金生産の産出量に関して，金ストックに対する毎年の各国の産出高の比率は，1849年には1.0%，50年には1.6%，51年には2.4%だったのが，52年以降は4.5-4.6%へと上昇したことを明らかにした。ここで彼がこの金生産の増加率を算出するにあたり，注意した点に触れておく必要がある。彼は，この1848年以降の「各年における金の生産量の・その年の初頭に種々の形で存在していた金の総量にたいする・比率」は，「かなり注意深い規定」で

(29) Newmarch (1853b) p46
(30) Newmarch (1853b) p47
(31) Newmarch (1853b) p48
(32) Tooke and Newmarch (1857) vol.5,p vi , 邦訳第5巻(上)，7ページ
(33) Tooke and Newmarch (1857) vol.5,pp vi - vii , 邦訳第5巻(上)，7ページ
(34) Tooke and Newmarch (1857) vol.6,p136, 邦訳第6巻，125ページ

あり，これに「この後の推論の多くのもつ実際的な意義が，大きくかかっている[35]」と述べている。

カリフォルニアで金が発見される以前の1848年，全世界には約5億6,000万ポンドの金が存在していた。それ以降の各年の新産金―フロー―は，この1848年時点のストックに順次，追加されていく。各年の金生産の増加率は，不変の5億6,000万ポンドに対してではなく，年々増加してゆく金の総額に対して算出されねばならない。すると，1849-56年に追加された金1億7,400万ポンドは，1848年末の5億6,000万ポンドに対して，1/4（27.6%）の増加になる。さらに，フローに大きな増減が無いとすれば，増加する一方の総ストックに対する比率は小さくなっていくはずである。先の各年の金生産の金ストックに対する増加率とはこの数字を示している。

そして第二に1848-56年の9年間で，商業世界の主要部分での金属通貨流通は，約1/3増加した，と結論づけた。[36]

第三が，1851-56年の物価動向である。彼は，この6年間のロンドンとマンチェスターで，食糧として消費されるか，製造品の原料として使用される最も重要な55の商品価格表を作成した。55の商品は，植民地および熱帯地方の産品，食料品ならびに獣肉，製造品の原料，各種の金属，マンチェスター市場，ロンドンの建築業の六群に分かれ，価格は『エコノミスト』から1，4，7，10月の1日にできるだけ近い日付のものをとった。この価格表から，「六群の商品全体について―食料品および獣肉だけを例外として― 1851-56年の6年間に大きな価格の変動が―多くの場合急激な変動が―起こっている[37]」という結論を導き出した。

ニューマーチは物価動向を，それぞれ，Newmarch（1853b）では38の商品の，Tooke and Newmarch（1857）vol.6では47の商品の，Newmarch（1859），（1860a），（1861a）では41の商品の，価格自体の変動から観察した。

当初，これら商品価格変動の生データから直接，物価動向を分析していたニューマーチは，まずNewmarch（1859）において1851年を基準100とし，それ以降の商品価格を指数化した。「（生データで表された：引用者）変動は，基準100をもとにした比例的な結論という，より便宜的な形態に還元される[38]」。それと同時に，生データの商品数41は商品毎に平均され，20となった。

19世紀半ばの金生産の増加に伴って，物価，あるいは金の購買力への関心が高まった。その変化を計数化する目的で，最初に物価を指数化したのがニューマーチであった。「物価指数の父」と呼ばれるW.S.ジェヴォンズが試みた1863年に先立つこと，4年のことである。[39]

（35）Tooke and Newmarch（1857）vol.6,p149, 邦訳第6巻，135-136ページ

（36）Tooke and Newmarch（1857）vol.6,p158, 邦訳第6巻，143ページ

（37）Tooke and Newmarch（1857）vol.6,p168, 邦訳第6巻，145ページ

（38）Newmarch（1859）p96

もっともジェヴォンズが結合指数を試みたのに対して，ニューマーチが算出したのは商品毎の価格指数である。当時，ニューマーチの指数化に対して，ジェヴォンズは「我々はその価値をいくら評価しても，し過ぎることはない。トゥークとその他の物価問題に関する筆者が，何らかの手段で，物価表をまとめ，そこに含まれる一般的事実を導きだそうとしていることに感心している。[40]」と高く評価した。しかし「長々とした数字の表は，それを何気なく研究している人々にとっては混乱した情報のかたまりに過ぎない。それらは，少しの数字のみを選ぶ人々にとって，多分，誤りの原因だろう。それらを安全かつ完全に用いるためには，体系的な，しかし多分，退屈な計算と還元が必要である。[41]」とも付け加えている。

続いてNewmarch（1860b）では，各商品価格の1845-50年の6年平均を基準とする。それは，「一般的かつ明確な基準，それは金発見の最初の影響以前のいくらか十分な期間の物価および賃金の範囲を公正かつ正確に示している[42]」からであり，「私が健全かつ信用できると，強く考えたい[43]」からであった。そして金発見以降の物価動向を，この1845-50年の平均を基準として分析するという点では，ジェヴォンズも同様であった。彼らの物価指数作成の手法は，1864年2月以降，『エコノミスト』の付録『商況史および考察』の物価指数表に用いられる。[44]「これらの表を計画するにあたり，我々は『物価史』の最後の2巻の著者と，最近，立派な冊子，『確認された金の重大な減価』でジェヴォンズ氏によって採用された方法に従っている。[45]」更にジェヴォンズは後に，彼自身の研究が「ニューマーチによって始められたものと，実質的に同じ性格のものである[46]」とも述べている。このように，ニューマーチの作成した物価統計は『商況史および考察』に掲載されただけでなく，ジェヴォンズの分析にも貢献した。ところが，ニューマーチが『物価史』第6巻において，個別商品価格表にもとづくのみで，こうした物価指数にもとづいて分析していないのは，奇妙なことである。

以上の分析から，ニューマーチは，「事実の問題として，金属貨幣量の3分の1の増加でさえ，一般物価のこれに相当する上昇をもたらしたということも，また多くの商品群について価格のいくらかの上昇をもたらしたということも，事実ではなく，反対に諸価格が，より高い水準に上昇するよりは，むしろより低い水準に下落してきたということ[47]」を確認し，「一般物価の水準は，これらの金属貨幣の大きな増加によってそれほど大きい影響を受けていな

↙（39）ジェヴォンズの物価指数に関しては，片桐（2009b）3 - 9ページ，参照。
（40）Jevons（1909）p112
（41）Jevons（1909）p112
（42）Newmarch（1860b）p490
（43）Newmarch（1860b）p490
（44）Economist（1943）によれば，その筆者はニューマーチである。
（45）“S*upplement to the Economist, Commercial History and Review of 1863*” in *Economist*, February 20, 1864, p 4
（46）Jevons, W. S.“The Depreciation of Gold” *The Economist*, May 8, 1869
（47）Tooke and Newmarch（1857）vol.6, p194, 邦訳第6巻，176ページ

い[48]」という結論に達した。その後も，「少なくとも，事実は物価の継続的または一般的上昇を示さない[49]」，「新産金の影響は，いくらかの比較的，部分的な程度を除いて，一般物価を上昇させなかった[50]」と，この点に関して一貫していた。

そして彼は「6年平均からの変動の最も著しいほとんどすべての場合，特別な説明を要する[51]」と考え，価格変動に関して積極的に主張したのが，「供給と需要に影響を与える原因は，多くの場合，表の（価格：引用者）変動を説明するのに，全く十分である[52]」という点だった。『物価史』においても，「この6年間に価格の大きな変動…の見られる場合，そのすべてにおいて，それらの変動は，少なくとも第一には，供給と需要にかんする純粋に経済的な理由によって説明され得る」と述べた[53]。

4．2　利子率の動向

実業界や銀行業界では，新産金の増加は金の購買力へはほとんど影響を与えず，経済に何らかの影響を与えるとすれば，むしろ雇用および利子率といった実体経済に対してであると考えられた[54]。そして1852-53年初めには，1851-52年の利子率低下の経験をもとに「新産金が永久的に利子率と割引率を低下せしめ，金融逼迫の時期の再発をほとんどなくしてしまうであろうとする理論[55]」が一般的となった。

しかしニューマーチによれば，この理論には二つの欠陥がある。一つは「800万〈ポンドの〉新産金がわが国の通貨流通の増加になった[56]」という誤解であり，もう一つは「利子率をたんなる流通手段の量と結びつける」「馬鹿げた」理論である[57]。彼は前者に関して，イギリスに流入した新産金は金貨として流通するのではなく，イングランド銀行の銀行部準備の増加を通じて，割引率を引き下げ，その結果，金融市場および金融システムへ影響を与えたのだと

（48）Tooke and Newmarch（1857）vol.6, p177, 邦訳第6巻，161ページ

（49）Newmarch（1860a）p102

（50）Newmarch（1869）p372

（51）Newmarch（1860）p102

（52）Newmarch（1853b）p49

（53）Tooke and Newmarch（1857）vol.6,p169, 邦訳第6巻，154ページ。彼は，1851年と比べた1857年の原料価格の上昇は，需要の減少を伴わない供給の減少，または需要の増大と供給の不変によって説明できると考えている。更に最も重要な商品の綿花，羊毛，油そして金属の高価格の直接の原因は供給の不足よりは，需要の増大であるとも考えている。この後者に関して，トゥークは原綿についてはアメリカの収穫不足，イタリア産の不足に，羊毛については需要の増加に，亜麻と大麻については消費の拡大に，油類については供給の変動に，鉄については労働者の大規模なストライキに，価格上昇の原因を求めている。（Tooke and Newmarch（1857）vol.6, p665, 邦訳第6巻，639-640ページ）

（54）Fetter（1965）p242

（55）Tooke and Newmarch（1857）vol.6, pp197-198, 邦訳第6巻，179ページ

（56）Tooke and Newmarch（1857）vol.6, p201, 邦訳第6巻，182ページ

（57）Tooke and Newmarch（1857）vol.6, p201, 邦訳第6巻，182ページ

いう。[58]そして後者に関しては，1851-52年の利子率の低下の原因は，新産金がイングランド銀行準備の増加となったことにある，という。1853年6月までの18ヵ月の間に，イングランド銀行の準備金が800万ポンド増加したことは，割引率の低下に大いに寄与した。[59]「800万〈ポンド〉の新産金がわが国の通貨流通の増加になったからではなくて，この800万〈ポンド〉が，貸付先を求める―すなわち，まず第一にイングランド銀行からの前貸の形で，つぎには貸付および割引に用いるべき資本をもった他の銀行および個人からの前貸の形で―資本の準備の増加となったからなのである。[60]」

以上のように，確かに新産金は，割引率の引き下げとそれを通じた利子率の引き下げの効果をもたらした。[61]しかしそれは「永久的」ではなく，「その性質上一時的なものにすぎ[62]」なかった。この利子率低下は，商品の生産費用の低下と，短期・長期の借入を求める人々の利潤増加をもたらし，1853年には商業および企業は拡張した。更に資本の供給を上回る需要が生じたため，53年初めにはイングランド銀行の最低割引率が引き上げられた。1月にはそれまでの2％から2 1/2％，そして3％へと立て続けに，さらに6月には3 1/2％へと引き上げられた。[63]そして夏以降，割引率は一般に5％を上回っていた。

他方で，イングランド銀行が準備として保有する貴金属は，53年6月から56年末までの間に1億ポンド増加していた。以前の1851-53年には800万ポンドの貴金属のおかげで割引率は引き下げられたのに対して，今回は1億ポンドの貴金属でさえ，割引率を5％以下に抑えることができなかった。この状況の一つの原因はイギリスが1853，55年に収穫不足のため穀物を輸入し，54-55年の軍需品や兵站部食糧といった戦争支出をしたことによる，対外的な支払い増加にある。その結果，イギリスから金が流出し続けるという「商業界の最も注目すべき現象の一つ[64]」が生じた。多額の新産金はオーストラリアからイギリスに到着するやいなや，すぐさまヨーロッパ大陸およびその他オーストラリアを除く地域に対して流出し，加えてイングランド銀行が保有する金準備ストックさえ減少するほどだった。[65]もう一つの原因は，食糧の高価格，戦争のための税，オーストラリアおよびアメリカ向けの輸出における損失，これらによる圧迫，そして新しい企業および拡大した商業分野に資本が吸収されたために，資本需要が資本供給を上回り，資本の提供者はより有利な条件―高利子率―を得たこと

(58) Newmarch (1853) p38, p39, United Kingdom. Parliament (1857) p118 Q1353
(59) cf. Tooke and Newmarch (1857) vol.6, p202, 邦訳第6巻，183ページ
(60) Tooke and Newmarch (1857) vol.6, p201, 邦訳第6巻，182ページ
(61) ニューマーチは，「割引率」を短期貸付金利，「利子率」を長期貸付金利と区別している。cf.Tooke and Newmarch (1857) vol.6, pp200-201, 邦訳第6巻，182ページ
(62) Tooke and Newmarch (1857) vol.6, pp200-201, 邦訳第6巻，182ページ
(63) Newmarch (1853b) p36
(64) Tooke and Newmarch (1857) vol.5, p281, 邦訳第5巻（上），272ページ
(65) Tooke and Newmarch (1857) vol.5, p279, 邦訳第5巻（上），269-270ページ，vol.6, p202, 邦訳第6巻183ページ, United Kingdom. Parliament (1857) p126 QQ1427-1429

である。[66]

さらにこの53-56年には，割引率の引き上げとそれに伴う利子率の上昇にも関わらず，金融逼迫・信用不安は生じなかった。「この極端な逼迫や信用不安が起こらなかったということのなかに，1853年7月以降わが国に輸入された1億〈ポンド〉の新産金の影響が，非常にはっきりと跡づけられ得るであろう。要するに，この1億〈ポンド〉が大きな助けになって，われわれは過去3年間の危機と災難を，利子率および割引率の高騰ということより以上の悲惨な結果に会うことなしに切り抜けることができたのである。[67]」この1853年末にとどまらず，1854年秋と1855年秋にも，イギリスへ到着する新産金がイングランド銀行の準備の追加となり，金融逼迫の解決手段となったと述べ[68]，ニューマーチは，もっぱらイングランド銀行との関連でイギリスに流入した新産金の影響を好意的に評価している。

４．３　新産金の国際的伝播と実体経済への影響

ニューマーチは，「商業世界で流通手段として用いられる金の量の大きな増加によって生ずる効果について一般的に認められているあらゆる理論[69]」，「金属貨幣の増加が単にこの増加した量の力で物価を引き上げるという・先験的な（a priori）傾向[70]」はまず第一に事実に反するとして，貨幣数量説を否定する。[71]

それに留まらず，ニューマーチにとって，貨幣数量説は「通貨流通と価格との要因」は「究極的な結果」と捉え，「より副次的で仲介的な働きをなした作用」とは考えない点でも，誤りである。[72]

「物価水準がつねに貨幣の量に依存すると主張する抽象的な議論は，種々の理由にもとづいて，商業上の諸問題を幾何学上の諸問題と同じように扱うことから生まれる誤った推論の目立った一例だといってよいであろう。この抽象的な議論は，貨幣の量が2倍になれば物価も2倍になるだろうと推定し，経過期間の長さやこの過程にともなって起こるであろういろいろな変化の大きさには・ふれるとしても・ごくわずかしかふれないのである。[73]」

（66）Tooke and Newmarch（1857）vol.5, p279, p281, 邦訳第5巻（上）270，271ページ，vol.6, p202, 邦訳第6巻，183ページ

（67）Tooke and Newmarch（1857）vol.6, p203, 邦訳第6巻，184ページ

（68）United Kingdom.Parliament（1857）p135 Q1509

（69）Tooke and Newmarch（1857）vol.6, p193，邦訳第6巻176ページ

（70）Tooke and Newmarch（1857）vol.6, p235，邦訳第6巻212ページ

（71）Tooke and Newmarch（1857）vol.6, p195，邦訳第6巻177ページ。彼はまた，第6巻末の付録Ⅱの16，17世紀のアメリカからの貴金属流入に関する研究で，第一に，1492-1570年の80年間に金・銀が2倍に増加したにもかかわらず，その間の物価の上昇は部分的かつわずかだったこと，第二に，実際の物価の上昇は1570-1640年の70年間かかったこと，第三に，この140年間で貴金属のストックは600%の割合で増加したにもかかわらず，物価の上昇は200%だったこと，を指摘している。

（72）Tooke and Newmarch（1857）vol.6, p193，邦訳第6巻175ページ

「金属貨幣の増加量の拡散に関連するいろいろな事情が，純粋に副次的なものであって考察の外においてもよいとすることも，正しくない。反対に，すでにわれわれの観察したように，またこれからもなお一層観察するであろうように，この拡散の過程にともなって，抽象的な論拠にもとづいて行われた先験的な（*à priori*）推論を大きく打ち消すような諸々の要因が作用するのである。[74]」

新産金の影響として，まず産金国で金採掘者の賃金が4倍に増加し，それに続いて，その他の労働者の賃金も4倍に増加した。[75]それに伴って彼らの支出が増加し，あらゆる労働者の商品需要は以前の4倍に増加した。この過程は，更に労働者から資本家へと進み，産金国のあらゆる階級の所得増加をもたらした。この所得の増加から生じる商品需要によって，商品価格は上昇する。しかしその商品価格の上昇は一律ではなかった。オーストラリアが海外から輸入する商品は容易に供給され，需要を超過するため，価格は低水準で推移した。それに対して，産金国内でしか生産されない商品―例えば，肉や農作物―の供給は比較的不足するため，価格は上昇する傾向にあった。[76]

次に新産金は非産金国へいかに伝播してゆくのかをみてみよう。新産金は，まず産金地域が需要する輸出財貨を生産する国々の熟練と資源に比例して，各国に配分される。イングランドでは他国よりも，輸出用財貨の生産労働の勤勉と熟練が大きく，その生産能力を増進させる発明，便宜，資源も有している。そのために，イングランドの所得と物価は高くなる。[77]更に，イングランドは，最も需要が多く，最小の容積のなかに最大の価値を含む財貨を輸出し，鉱山に（距離的にではなく）実質的に最も近い，という諸条件にも合致する。[78]イングランド商品に対する需要の大きさのため，イングランドからの輸出品に対する支払いとして，産金国から新産金の大部分はまずイングランドに向かう。[79]産金国からの需要増加のために，イングランドで生産は増加し，それに伴って利潤と賃金が増加する。

更に，新産金は，この新産金の供給の各部分がそこにむかって送られるところの他の地域で需要される・輸出財貨を生産する国々のそれぞれのもつ熟練と資源に比例して，商業世界全体に配分されてゆく。[80]イングランドは，自国の使用と消費のための外国産品に対して最大の需要をもつ国であり，外国生産品の収集と分配にも，最も大きく参与している国である。[81]

---

(73) Tooke and Newmarch (1857) vol.6, p194，邦訳第6巻176ページ
(74) Tooke and Newmarch (1857) vol.6, p195，邦訳第6巻177ページ
(75) Tooke and Newmarch (1857) vol.6, pp189-190, 邦訳第6巻172ページ，Tooke and Newmarch (1857) vol.6, p806
(76) Tooke and Newmarch (1857) vol.6, pp804-812
(77) Tooke and Newmarch (1857) vol.6, p206，邦訳第6巻186ページ
(78) Tooke and Newmarch (1857) vol.6, p209，邦訳第6巻189ページ
(79) Tooke and Newmarch (1857) vol.6, p209，邦訳第6巻189ページ
(80) Tooke and Newmarch (1857) vol.6, p210，邦訳第6巻190-191ページ
(81) Tooke and Newmarch (1857) vol.6, pp211-212, 邦訳第6巻192ページ

そこでイングランドにおける外国産原料品・奢侈品の消費増大の結果，その支払いとして，今度は新産金はイングランドから全商業世界へ再配分されることになる。

最後に，ニューマーチの考える貴金属の増加がもたらす「究極的な結果」，言い換えれば，「経過期間の長さやこの過程にともなって起こるであろういろいろな変化」，また「金属貨幣の増加量の拡散に関連するいろいろな事情」を考察しよう。

ニューマーチは，新産金が伝播していく過程で生じる「真実の富と資源との急速な増大」[(82)]を「究極的な結果」として強調した。産金国における所得および支出の増加により，有効需要は増大し，生産も増加した。最初の短期間で，産金国内で需要の増加する領域は急速に拡張していった。「家屋の建築，土地の耕作，未開拓地の開墾，鉄道の建設，都市の美化，港湾および船渠の整備，学校および大学の創設，そしてなによりも顕著なこととして，ほとんど一足飛びでの大規模な外国貿易の実現，―約言すれば，あらゆる事業の盛行と一国を富裕にし強力にすることのできるあらゆる技術の急速な進歩，これらが，産金諸国において自国の新産金の供給を年々他の諸国に輸出することによって，ほとんど確実に達成された結果である。[(83)]」

その後，商品への有効需要はこれらの商品需要に応じる地域へ，更にその原料を供給する地域へと拡大していった。「同様な発展の順序を追って，諸商品に対する需要の増加する領域は―あるいはもっと適当な語を使えば増加する所得の支出される領域は―月ごとに広がっていかざるを得ないのである。[(84)]」イングランドでは，生産手段の改良と拡張をもたらし，資本家および労働者の所得増加は貯蓄として資本の蓄積をもたらした。またその他の「金が諸商品と交換に送り込まれた諸国の内部では，諸商品に対する継続的な有効需要が，オーストラリアとカリフォルニアで起こったのと同じ効果を，だがもっと限定された規模で，生み出した[(85)]」これら一連の過程は，「金の量の増加が，それに相当する物価水準の上昇によって相殺され得るまでに経過しなければならないかなり長い期間[(86)]」に生じる。

以上のように生産への大きな刺激こそが，新産金の増加に伴う貨幣量の増加がもたらす利益であり，これをニューマーチは「真実の富と資源」の増加とみなした。「貨幣のストックは，生産にたいしてつぎのような刺激を，すなわち普通の有料道路を鉄道に転換することによって，…あたえることと同じようなことである。そして貨幣ストックを年々に増加するということは，新しい追加的な鉄道網を，年々建設することと，非常に似たことなのである。[(87)]」

---

(82) Tooke and Newmarch (1857) vol.6, p214，邦訳第6巻194ページ
(83) Tooke and Newmarch (1857) vol.6, pp192-193，邦訳第6巻174-175ページ
(84) Tooke and Newmarch (1857) vol.6, p191，邦訳第6巻174ページ
(85) Tooke and Newmarch (1857) vol.6, p192，邦訳第6巻175ページ
(86) Tooke and Newmarch (1857) vol.6, p217，邦訳第6巻197ページ
(87) Tooke and Newmarch (1857) vol.6, p216，邦訳第6巻196ページ

5　むすび

ニューマーチの特徴は，民間人の報告から公式統計に至るまでの，膨大かつ詳細なデータに基づいた事実の分析にある。これには，民間銀行と保険会社における豊富な実務経験が関係していると考えられる。そのうえで金産出の増加と物価および金価値の動向との関連を解明すべく，1859年以降，個別の商品価格指数を作成し，1864年以降は物価指数を作成している。にも関わらず，主著『物価史』第5,6巻においては，その萌芽さえ見られないのは，非常に奇妙なことである。

彼がそれ程，事実を詳細に分析した目的は，シュンペーターのいう通り，「敵対する経済的主張を追求し，できればこれを粉砕する」ことにあった。

19世紀の新産金の増加の経済的影響の分析を通じて，彼がまず批判の対象としたのは貨幣数量説である。古典派の貨幣数量説が主張する貨幣の中立性によれば，貨幣量の変化は，財の生産・消費，雇用，賃金，そして利潤等の実体経済には何ら影響を与えず，一般物価水準を上昇させるのみである。実際の経済をあたかも物々交換経済であるかのようにとらえ分析したうえで，貨幣は実体経済を覆うヴェールに過ぎないとみなした。そしてマネーサプライと物価水準との間に対応関係が成立し，後者は前者に比例して決まると考える。ニューマーチは，一つには，商品価格は供給または需要への影響によって変動したと，二つめには，新産金の増加はむしろ実体経済へ有利な作用を及ぼしたと主張し，貨幣数量説および貨幣の中立性を否定した。

もう一つの批判対象が，新産金により金利は低下し，その結果，永久に金融逼迫は生じないという考えである。ニューマーチは，新産金は通貨の増加に結びつかないと，さらに金利は流通手段の量とは無関係であると主張し，この考えを退けた。

こうしてニューマーチは「敵対する経済的主張」の「粉砕」に成功はしたものの，新産金の増加に伴う，物価動向と金利動向との関連を明らかにはしていない。これがシュンペーターによって，トゥークとニューマーチは「経済理論の把握に欠ける」と指摘された所以であると考える。そして彼らが意図した「事実の提示とその説明」との関連づけに関しては，前者が優先され，後者はあくまでマイナーな位置づけに過ぎなかった。

引用・参考文献

Ashbee, R. A.（1979），“William Newmarch and Glyns” *The Three Banks Review*/Royal Bank of Scotland, Glyn, Mills, Williams Deacon's Bank, no.122, June, pp49-60

Bordo, Michael David（1975），“John E. Cairnes on the Effects of the Autralian Gold Discoveries, 1851-73:An Early Application of the Methodology of Positive Economics” *History of Political Economy*, vol.7 no.3, Fall, pp337-359

The Economist

The Economist ed.（1943），*The Economist 1843-1943 A Centenary Volume*, Oxford University Press:London.

岸田理訳『『エコノミスト』の百年 1843-1943』，日本経済評論社，1994年

Fetter, Frank Whitson（1965）, *Development of British Monetary Orthodoxy 1797-1875* , Harvard University Press:Cambridge, Massachusetts

FitzPatrick（1960）, "Leading British Statisticians of the Nineteenth Century" *Journal of the American Statistical Association*, vol.55 no.289, pp38-70

Fraser, Lindley M.（1934）, "Newmarch,William" in *Encyclopaedia of the Social Sciences* vol.11, 1934 editor in chief Edwin R.A.Selgin;associate editor Alvin Johnson:The Macmillan Company:New York, pp368-369,

Gregory, T. E.（1928）, "Introduction" in *A History of Prices and of the State of the Circulation from 1792 to 1856* by Thomas Tooke and William Newmarch, P. S. King and Son, Ltd.:London, pp 5-120

Jevons, William Stanley（1909）, *Investigations in Currency & Finance* edited,with an introduction, by H. S. Foxwell, M. A., Macmillan and Co.,Limited:London

Journal of the Statistical Society of London

Kim, Jinbang（1997）, "Newmarch, Cairnes and Jevons on the Gold Question and Statistics" *Journal of the History of Economic Thought*, vol.19 no.1, Spring, pp49-70

Newmarch, William（1853a）, "On New Supplies of Gold" *British Association for the Advancement of Science Transactions*, vol.23, pp110-111

———（1853b）, *The New Supplies of Gold:Facts, and Statements,relative to their Actual Amount;and Their Present and Probable Effects*, London

———（1854）, "Facts and Statements Connected with the Question, Whether,in Consequence of the Discoveries within the Last Six Years, the Exchangeable Value of Gold in this Country Has Fallen below its Former Level" *Report of the Annual Meetings of the British Association for the Advancement of Scienc*e, vol.24, p143

———（1859）, "Mercantile Reports of the Character and Results of the Trade of the United Kingdom during the Year 1858;with a Reference to the Progress of Prices, 1851- 9" *Journal of the Statistical Society of London*, vol.22 no.1, March, pp.76-100

———（1860a）, "Results of the Trade of the United Kingdom during the Year 1859;with Statements and Observations relative to the Course of Prices since the Year 1844" *Journal of the Statistical Society of London*, vol.23 no.1, March, pp76-110

———（1860b）, "On Methods of Investigation as Regards Statistics of Prices,and of Wages in the Principal Trades. Being the Programme Prepared by Request for the Section（IX）Commercial Statistics, of the Fourth Session（1860）, of the International Statistical Congress held in London in July, 1860" *Journal of the Statistical Society of London*, vol.23 no.4, December, pp479-497

———（1861a）, "Results of the Trade of the United Kingdom during the Year 1860;with Statements and Observations Relative to the Course of Prices since the Year 1844" *Journal of the Statistical Society of London*, vol.24 no.1, March, pp74-124

———（1861b）, "Statistical Science" *Report of the Annual Meetings of the British Association for the Advancement of Science*, vol.31, pp201-203

———（1869）, "Inaugural Address on the Progress and Present Condition of Statistical Inquiry, delivered at the Society's Rooms, 12, St. James's Square, London, on Tuesday, 16th November, 1869." *Journal of the Statistical Society of London*, vol.32 no.4, December, pp359-390

———(1871),“Report of the Council for the Financial Year ended 31st December, 1870, an for the Sessional Year ended with June, 1871, Presented at the Thirty-Seventh Anniversary Meeting of the Statistical Society, Held at the Society's Rooms, 12, St. James's Square, on Thursday, 22nd June, 1871;with the Proceedings of that Meeting” *Journal of the Statistical Society of London*, vol.34 no.2, June, pp236-251

——— (1878), “On the Progress of the Foreign Trade of the United Kingdom since 1856, with Especial Reference to the Effects Produced upon it by the Protectionist Tariffs of Other Countries” *Journal of the Statistical Society of London*, vol.41 no.2, June, pp187-298

O'Brien, Denis Patrick (1975), *The Classical Economists*, Clarendon Press:Oxford

——— (1998) “Newmarch, William” in *The New Palgrave:A Dictionary of Economics* vol.3, 1998 edited by John Eatwell, Murray Milgate, and Peter Newman, The Macmillan Press Limited:London, p652

Political Economy Club (1921), *Political Economy Club*, vol.6 (1899-1920) , reprint in 1980, NIHON KEIZAI HYORON SHA:Tokyo

Proceedings of the Royal Society of London

Report of the Annual Meetings of the British Association for the Advancement of Science

Royal Statistical Society (1885), *Jubilee Volume of the Statistical Society, June 22-24, 1885*, E. Stanford:London

——— (1934), *Annals of the Royal Statistical Society 1834-1934* , The Royal Statistical Society:London

Schumpeter, Joseph A. (1954), *History of Economic Analysis*, Oxford University Press:London. 東畑精一・福岡正夫訳『経済分析の歴史』岩波書店，2006年

Smyth, R. L. (1971), “The History of Section F of the British Association 1835-1970” in *Conflicts in Policy Objectives* edited by Nicholas Kaldor, Basil Blackwell:Oxford

Tooke, Thomas (1838), *A History of Prices, and of the State of the Circulation from 1793 to 1837* , vols.1&2, Longman, Brown, Green, Longmans, & Roberts.:London,reprint in 1972, Johnson Reprint Corporation:New York and London. 藤塚知義訳『物価史』第1,2巻，東洋経済新報社，1978年

———(1840), *A History of Prices, and of the State of the Circulation, in 1838 and 1839* , vol. 3, Longman, Brown, Green, Longmans, & Roberts.:London, reprint in 1972, Johnson Reprint Corporation:New York and London. 藤塚知義訳『物価史』第3巻，東洋経済新報社，1980年

———(1848), *A History of Prices, and of the State of the Circulation from 1839 to 1847* , vol.4, Longman, Brown, Green, Longmans, & Roberts.:London, reprint in 1972, Johnson Reprint Corporation:New York and London. 藤塚知義訳『物価史』第4巻，東洋経済新報社，1981年

Tooke, Thomas and William Newmarch (1857), *A History of Prices, and of the State of the Circulation, during the Nine Years:1848-1856* , vols. 5 & 6, Longman, Brown, Green, Longmans, & Roberts:London, reprint in 1972, Johnson Reprint Corporation:New York and London. 藤塚知義訳『物価史』第5，6巻，東洋経済新報社，1989, 90, 92年

United Kingdom. Parliament (1857), *Report from the Select Committee on Bank Acts with Proceedings and Minutes of Evidence*, facsimile reproduction 1969, Irish University Press Series of British Parliamentary Papers, Monetary Policy General 7, Irish University Press:Shannon Ireland

Westergaard, Harald (1932), *Contributions to the History of Statistics*, P. S. King & Son Ltd.,:London

Wu, Chi-Yuen (1939), *An Outline of International Price Theories*, Routledge & Kegan Paul Ltd.:London, reprint 1970, Kraus-Thomson Organization Limited:Nedeln/Liechtenstein

片桐謙（2009a),「J. E. ケアンズの『金問題の解決のための論評』について」和歌山大学経済学会『経済理論』第347号，1月，1-21ページ
――――（2009b),「W. S. ジェヴォンズの『確認された金の重大な減価』について」和歌山大学経済学会『経済理論』第352号，11月，1-22ページ
杉原四郎（1973),『イギリス経済思想史―J.S. ミルを中心として―』未来社
藤塚知義（1973),『経済学クラブ』ミネルヴァ書房